
邂逅

白井文子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
邂逅

【Nコード】
N1657W

【作者名】
白井文子

【あらすじ】
ゆめにつき二次創作。
ポニ子と窓付きの確執。

そこで見つけたのは、テントの様な建物だった。私は暫くその建物を眺めて、これで少し休めるな、と心の中で呟いた。長い間重たい水の中を動き回った体は疲弊しきつていて、どこでも良いからゆつくり出来そうな場所が欲しかったのだ。

中に入ると、そこは桃色で統一された部屋だった。建物の外観と内装が噛み合っていないのにはもう慣れっこだった。

それに、それよりも気になることがあった。

知っている匂いだ。私はここに来たことがある。それも、一度や二度ではないような気がした。

部屋を見回すと、部屋の隅に金髪を一つに結んだ少女が立っていた。他人の部屋だったか、と内心焦って、彼女に声を掛けようと思っただけれど、その前に彼女が振り向いた。色素の薄い瞳が、私を値踏みする様に眺める。

「あなた……」

少女が怪訝そうにそう呟いた瞬間、ざわりと鳥肌が立った。不潔な昆虫の、尖った無数の足が、胸の奥を不規則な動きで引つ掻く。不快で、出所の分からないその感覚に顔をしかめながら、私は手に持った包丁を彼女の前に翳した。

彼女は身じろぎ一つせず、相変わらず私をじっと見つめる。そのあまりにも真っ直ぐな眼差しに、此方がたじろいでしまう程だ。

「怖くないの」

「ええ」

身の危険に恐れ戦けばいい、という、残酷な衝動が簡単に打ち碎かれる。本当は、刺すのも逃げられるのも、そこまで望んでいなかっただけだ。

何の表情も浮かべずに立っていた彼女が、ゆっくりと口を開いた。「あなたを知っているわ」

臆病な心臓が勢い良く跳ね上がった。凄まじい寒気と共に、馬鹿みたいに大きくなった鼓動が体中に響き始める。

「そう。私はあなたを知らないけれど」

精一杯平静を装って返した声は、情けなくなる程に震えていた。彼女の瞳が恐ろしかった。絶対にもう見ないと心に誓って封じ込めた何かを、彼女は直ぐに掘り当ててしまいそうだった。

「あなたの名前は？」

反射的に答えようとしてハッと口籠り、私は喉まで出かけた言葉を飲み込んだ。

そして、零れそうになったのとは違う返答を返す。

「窓付き」

「そう。窓付き。可笑しな名前を付けたわね」

彼女はそう、朗らかに言い放った。

視界がぐらつく。私の恐怖を煽る嫌な予感が、確信に変わる。

この人は、私を知っている。それも、多分私以上に。

「名前を付けた？何言っているのかしら」

喉の奥が詰る様な感覚と、掠れた声。込上げてくる得体の知れない恐怖が目の前の少女に伝わっている気がして、それが又違う恐怖を呼び起こしていた。

「あなたは窓付きなんて名前じゃない」

静かな、しかし断定する様な口調に気圧されて、私は思わず彼女から後退った。背中が冷たい壁に触れる。もう少しで頭が部屋の明かりを消すスイッチを押すところだった。

自分を守る言葉を一生懸命に探して、一つ一つ丁寧に吐いていく。まるで、巨大なパズルの四辺を埋めて行く様に。仮に出来上がったとして、それがしっかりした防壁になってくれるとは思えなかったけれど。

「窓付きよ、だって、窓からはお空が見えるじゃないの」

思っていたよりもずっと静かに零れた言葉は、何だか自分のものではない様に思えた。彼女が何を感じているのか、表情からは全く

計り知れなかつたけれど、私はそのまま手応えの無い反駁を続けた。
「だから窓を持ってきているの。私は窓付き。他の誰でもない」

ここまでが精一杯だった。私はそれだけでもうすっかり疲れきっていたのだ。必死の思いで積み上げた防壁には、結局私自身をほんの少し励ますだけの力しかなかったかも知れない。

少女は黙っていたけれど、暫くしてひとつ溜息を吐いた。

「じゃあ、窓付き」

窓付き。

彼女にあっさりとそう呼ばれて密かに狼狽しながら、私は逸らしていた目を怖々と彼女に向けた。そして、自分の目を疑った。

今まで無表情だった彼女は、何の前触れも無く悲しそうに顔を歪めていた。ついまじまじとその顔を見つめて、それから首を傾げてみせる。

「何」

彼女は何処か躊躇う様に目を泳がせて、やがて何やら観念した様な顔で私を見据えた。出来るだけ引けを取らぬ様、私も彼女を見つめ返す。

目を合わせたまま一瞬沈黙が流れ、彼女の表情が又少し翳った瞬間に、その言葉は聞こえた。

「窓付きは、本当に私を知らないの？」

世界が静止したかの様に思えた。ざわりざわりと騒ぎ出す胸の底に痛みすら感じる。顔を歪めたくなる様なその感覚に逆らって、私は無理矢理笑みを浮かべて見せた。

「本当」

間違いは無い筈だったその言葉に幾分か安心し、そして心を抉られる。細い針を一本一本丁寧に刺し込んでいく様な胸の痛みに耐えながら彼女の顔色を窺うと、彼女は小さく口を開け、そのままじつと私を見ていた。

「……そう」

口を殆ど動かさずに放たれたその言葉は、酷く切なげな響きを孕

んでいた。戸惑う私に、彼女は寂しそうに微笑んでみせた。

「御免なさい、窓付き。訂正させて。私はあなたのことは知らない」
少女が静かに顔を背けると、しなやかな金のポニーテールがふわりと揺れる。輪郭の整った横顔には、自虐的な笑みが浮かんでいた。怪訝に思ったけれど、私には黙って彼女を見つめるしか出来なかった。それ程の何かを、きつと悲しみに良く似たものを、今の彼女は放っていた。

歪んだ唇が躊躇いながら形を変えて行くのが分かる。

「いいえ。正確には……」

次の言葉が何か、私が精一杯思考を巡らせられる程たつぷりと時間を開けて、彼女はふふつと笑った。瞳だけが此方を向き、私を捉える。笑みが及んでいない鋭い瞳に、背筋を冷たいものが滑り降りた。

「あなたはもう、私の知っているあなたじゃあないわ」

何と答えていいか分からずに、私は黙ったまま俯く。彼女と目を合わせているのが恐ろしかった。

何時の間にか、私は全てを理解していた。

あれ程の恐怖を感じさせた何かを。彼女とこの部屋に感じた既視感の訳を。得体の知れない恐怖の正体を。それらの全ては何のきっかけも持たずに、私の中に平然と溶け込んで来たのだ。

全て理解してしかし、私は逃げ出さなかった。只俯いて、彼女の次の言葉を待つことしか、私には許されていないような気がした。

「少し遅すぎたのね」

少女のハスキーな声が、更に掠れて響く。返事はしなかった。

「今更謝ったって、もう許しては貰えないかしら」

「何のこと？」

分かっている筈は無かったけれど、さも最初からそこに在った様な顔をして私の中に居座る記憶は、あまり見返したいものではなかった。

私は窓付きだ。もう他の誰でもない。だから私には関係の無いこ

とだ。

そう唱え続ける文句はきつと呪詛だろう。金髪の少女の言葉と一緒にになって私自身を蝕んでいく。分かっているにも、祈るのは止められなかった。それが救いをもたらす祈りであることをも、私は祈っていた。

「失って初めて分かるものってきつと有る。あなたが居なくなっただけから、まるで自分が化け物になってしまったみたいに思えたの。あんなに後悔したことって無かった」

少女の語る言葉にどうしても白々しいものを感じ取ってしまう自分に吐き気がする。少女の表情は、こんなにも鬼気迫っているというのに。

否、あれだけ残酷な嘘を吐いていたのだから、彼女は私なんか簡単に欺ける筈なのだ。だから用心しなくては。もう二度と傷付かない様に。私以外に誰が私を守るというの。

「私たち、もう元には戻れないかな」

沈黙が降りる。

恐る恐る顔を上げると、彼女は既に目を伏せていた。合わなかった目線に思わず安堵する。暫くぼんやりと彼女のポニーテールを見ていた。金の髪が光を反射して、きらきらと輝いている。眩しい位だ。

私は彼女の金髪が嫌いだった。自分の知らない彼女の姿を見せ付けられている様で。彼女の艶やかな黒い髪を、この上なく好きだったからでもある。

でも、それはもうずっと昔の話。窓付きには関係ない話だ。

何時まで経っても彼女は顔を上げなかった。これ以上彼女と語る必要は私には無かった。そのまま部屋を後にしようと、すぐ後ろのドアノブに手を掛ける。

「じゅめんね」

無意識の内にそう呟いていた。何に対する謝罪かは分からない。

只、黙って出て行くのは気が引けた。

そして、私は彼女の名前を小さく付け加えた。その名前を呼ぶことで自分がどうなるのか不安だったけれど、それは思っていたよりもずっと簡単に通り過ぎて行った。少女の肩が小さく震える。彼女が顔を上げる前に出て行かなくては。

私が背を向けた瞬間に、彼女が私の名前を叫んだ。窓付きではない私の名前を。頭の中が真っ白になる。焦って壁に手を付き、勢い良く扉を開けようとした瞬間、部屋の中が真っ暗になった。

どうやら勢いで電灯を消してしまったらしい。スイッチを押した左手が視界の隅に見える。

混乱した頭のまま、私は咄嗟に少女のいる方を振り向く。そして息を呑んだ。

少女の姿は、化け物に変化していた。

真っ黒な体。窓からの僅かな光に照らされ、肌がぬめぬめと光っている。そのあまりにおぞましい姿に肌が粟立つ。虫唾が走った。

化け物はじっとこちらを向いている。仮面の様な顔にいやらしい半笑いを浮かべて。

私はドアノブに飛びついた。駄目だ。開かない。くらくらと眩暈がする。背後から、化け物が発しているのだろう、不気味な音が響いてくる。空回り続けるドアノブを殴りつけて、私はキツと化け物を睨み付けた。

恐怖で意識が遠のく。

私はこいつを知っている。知っている。これは彼女だ。あの少女の本当の姿だ。私はこの仮面を、前にも見たことがある。

そして、この化け物は私に、絶望を与える。知っているのだ。

「あなたなんか大嫌い！」

叫んだ声はだらしなく上ずっていた。格好悪い。私は強く頬を抓った。

次の瞬間、私はベッドの上にいた。

そつと寝返りを打ってみる。少しだけ埃が舞った。

瞼の裏にうつすらと残ったあの仮面の薄笑いが、何故だか泣いて
いる様にも見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1657w/>

邂逅

2011年8月27日03時12分発行